

阮伯卓「汗漫遊記」（1919年4月-1920年5月）について

吉川次郎

「汗漫遊記」とは？

「汗漫遊記」は近代ベトナムを代表する雑誌として知られる『南風雑誌』（*Nam Phong Tạp Chí*）¹の漢文版に第22期から第35期まで連載された紀行文である。著者の阮伯卓（号は焦斗，Nguyễn Bá Trác，1881-1945）はベトナムのクアンナム省に生まれた。伝統的科挙システムにおいて若くして挙人となるも、近代的な新知識や思想を求めて海外に赴く20世紀初頭の啓蒙運動（「出洋」）の大きなうねりを受けて出国、東南アジアから東アジアの各地を6年間放浪した。帰国後はフランス・インドシナ総督府の新聞雑誌を司る部門で働き、1919年から翌年にかけての「汗漫遊記」執筆当時には、『南風雑誌』の漢文版主筆を務めていた²。「汗漫遊記」は掲載欄に「伝記」と銘打たれているように、訪れた場所について記す紀行文である以上に、放浪に費やされた自らの前半生をたどるいわば自叙伝であった。

したがって、「汗漫遊記」には2つの色調がある。1つは自らが訪れた国や地域の歴史・文化・風俗・国民性などについて読者に紹介するものである。ときに著者の体験も盛り込まれ、また日越比較や文明批評の視点による記述からは著者の思想がうかがわれて興味深い点はあるものの、おしなべて概説的かつ平板な印象を拭えない。一方、もう1つは著者自身の足跡を振り返り、そこで起こるさまざまな事件や出会った人々に何を感じ、いかに行動したかを示した部分で、こちらは生き生きとした描写の中にも多くの発見がある。また、潘佩珠（Phan Bội Châu）が主唱した

1 『南風雑誌』は1917年にハノイで創刊。ファム・クイン（Phạm Quỳnh）が主筆となり、1934年の210号まで出版された。なお、南山大学名古屋図書館にマイクロフィルム版が所蔵されている（2014年1月現在）。『南風雑誌』については、Đỗ Quang Hưng（Chủ biên）：*Lịch sử báo chí Việt Nam 1865-1945*, Nhà xuất bản đại học quốc gia Hà nội, 2000を参照。漢字・漢文との関わりについては、岩月純一『『ベトナム語意識』の形成と『漢字／漢文』－『南風雑誌』に見る』『東南アジア－歴史と文化』24号，山川出版社，1995年に詳しい。ファム・クインについては、古田元夫『ベトナムの世界史－中華世界から東南アジア世界へ』東京大学出版会，1995年，62-65頁にも言及されている。

2 阮伯卓の略歴については、Nguyễn Q. Thắng－Nguyễn Bá Thế：*Từ Điển Nhân Vật Lịch Sử Việt Nam*, Nhà xuất bản Văn Hóa, 1999, 482-483頁を参照。

「東遊運動」（日本への留学運動）にからむベトナム独立運動の実相を伝えるものとしても、非常に意義ある内容となっている。

これらの特徴を踏まえた上で、全14章からなる「汗漫遊記」の構成をごく簡単に示したい（通し番号は筆者による、丸括弧内は『南風雑誌』の号数と出版年月を示す）。

①冒頭部分～第1章（第22期，1919年4月）

冒頭で1908年に家を離れてから1914年にサイゴンに戻るまでの6年にわたる放浪期間を振り返る。第1章は国内留学のいきさつとタイ行きまで。

②第2章（第23期，1919年5月）

バンコク到着とタイの国情について。

③第2章～第4章（第24期，1919年6月）

タイの歴史と仏教について。バンコクに暮らすベトナム人にも言及。第3章では香港行きと香港の街の様子、数ヶ月の学校経験。第4章では日本行き（上海を経て、横浜から東京へ）のいきさつと日本到着時の困難を振り返る。

④第4章（第25期，1919年7月）

日本の歴史、とくに明治維新と立憲政体の成立について。

⑤第4章（第26期，1919年8月）

日本人の学問や政治・法律・教育について。

⑥第5章～第7章（第27期，1919年9月）

第5章～第6章において日本社会の様相や風俗習慣について論じる。第7章では東京から東海道線で神戸を経て長崎に至り、船で上海に渡るまでの過程が記される。

⑦第8章（第28期，1919年10月）

中国の地理歴史や漢民族の民族性・風俗習慣を概説。近代以降の社会体制を記述。

⑧第9章（第29期，1919年11月）

上海から南京へ赴く。革命党容疑での拘留を経験後、南京各所を参観。上海へ戻った後の朝鮮人志士との出会い。日韓併合に至る朝鮮近代史の振り返り。上海の概説。

⑨第9章～第10章（第30期，1919年12月）

上海フランス租界の繁栄とベトナム人警備兵への信頼を語る。第10章では、上海郊外での「元君」との出会いとともに、広西省桂林の陸軍幹部学校入学が決まったいきさつを記述。

⑩第11章（第31期，1920年1月）

香港経由での桂林入り。受け入れ時には蔡鍔が対応、幹部学堂での軍事学習の日々。

⑪第11章（第32期，1920年2月）

桂林に暮らすベトナム人母娘との出会いと別れ。その壮絶な人生についても描く。

⑫第12章（第33期，1920年3月）

桂林から漓江を下る際に遭難。梧州で武昌蜂起の知らせを受け、香港に急行。香港の祝賀ムードを味わう。一か月の広州滞在の後、北伐軍に加わるべく上海・南京に赴き、1912年3月の南北和議成立とともに北京に入る。

⑬第12章（第34期，1920年4月）

北京の紹介。辛亥革命後の北京の政治状況素描。北方女性の観察，纏足について。

⑭第13章～第14章（第35期，1920年5月）

第13章では，第二革命に参加すべく，天津から上海・南京・武漢を経て重慶に至り，市街戦を経験する。帰国を決意し，上海から広州へ向かう。第14章では，広州の街を紹介。とくに広州の伝統的風俗や広東人の性格についての記述に多くを割いている。

「汗漫遊記」の難しさ

「汗漫遊記」の内容は，近代を模索するベトナム知識人の軌跡を刻んだものとして，それ自体価値をもつが，一方で注意すべき点もある。日記や回想録が，重要な歴史資料であるとはいえそのまま事実を反映するものではないことは改めていうまでもないが，「汗漫遊記」において考慮すべき特段の事情としては，著者の阮伯卓がいわゆる東遊運動に関与している時点ですでに記述上の制約があり，さらにその運動圏を離れてベトナム国内に戻っている点を挙げなければならない。そもそも掲載誌が植民地支配下で公刊されている「親仏」の雑誌であることも見逃せない。

1つの例を提示すると，上記⑨に登場し，⑩・⑪の桂林の日々を共にする「元君」だが，上海郊外の花弁農園に働いていた彼は，文中では「余の同郷の友はこの園に入る際に元姓に改めた」と説明され，最後までその本名が明かされることはない。しかし，いくつかの資料からこの「元君」は潘佩珠の身辺にいた独立運動家の学生阮泰拔（Nguyễn Thái Bạt）であることが推測される³。また，「元君」が日本滞在時に恩を受けた「某医学博士」とは，東遊運動期にベトナム人留学生を多く助けた人物として有名な浅羽佐喜太郎に他ならない。このようにいわば伏せ字のような曖昧化がなされる一方で，全く語られていない部分もある。桂林に赴いて軍事を学んだベトナム人には他にも，阮徳功（Nguyễn Đức Công，仮名は黄茂仲）・阮式唐（Nguyễn Thức Đường，仮名は陳有力）らがあり，潘佩珠の記述⁴によれば，阮伯卓は当然，阮式唐のことに言及してもいいは

3 白石昌也『ベトナム民族運動と日本・アジアファン・ボイ・チャウの革命思想と対外認識—』巖南堂書店，1993年，352-353頁。

4 辛亥革命後に結成されたベトナム光復会の軍事部門である光復軍について，広西陸軍幹部学堂出身者として，陳有力（阮式唐）の名が阮焦斗（伯卓）・阮泰拔と併記されている（潘佩珠の『自判』（別名『潘佩珠年表』），内海三八郎（千島英一・櫻井良樹編）『ベトナム独立運動家潘佩珠伝—日本・中国を駆け抜けた革命家の生涯—』芙蓉書房，1999年に附属の原文，293頁）。

ずであるが、文中では一切触れられていない。これは阮式唐が後に捕らえられ、1916年にハノイで処刑された⁵ことが影響しているものと思われる。

このように、どこまでが明かされているのかという記述の階層分析、あるいは語られている部分と語られていない部分の弁別それ自体が当時のベトナムを取り巻く政治的・社会的諸関係の考察となり得る。帰国後5年の状況は関係者にとって生々しい現在進行形であり、「汗漫遊記」を真に読み解くためには、多数の資料を参照しながら事項の一つ一つを丹念に確認していく作業が重要であろう。

「汗漫遊記」の多面的意義

「汗漫遊記」が資料的に重要な理由として、ベトナム独立運動に関わる点以外で3点を挙げておきたい。

1つには、小説「万里逋逃記」を読み解く上で欠かせない、という点である。「万里逋逃記」は浙江省杭州で発行されていた雑誌『兵事雑誌』に1925年から26年にかけて連載された小説で、主人公武漢生の近代アジア流浪を描いた作品である。筆者は先に『兵事雑誌』を取り上げた論考⁶の中で、とくにこの作品について紙幅を割いて論じたが、その後、同作品が『越南漢文小説集成』20巻に収録されるにあたって陳慶浩氏が寄せた「提要」において、武漢生の述べる履歴の多くが阮伯卓の「汗漫遊記」に依拠していることを教えられた⁷。陳氏は「万里逋逃記」はそのテキストの錯綜した成り立ちから「ごった煮の寄せ集め」であるとの断を下しているが、例えば、小説「万里逋逃記」において主人公の桂林行きはなく（代わりに山東省の青州に赴く）、したがっておそらくベトナム民族主義と中国との軋轢をもたらす可能性のある上記①のベトナム人母娘のエピソード⁸も全く出てこないことをどのように捉えるかなど、「万里逋逃記」と「汗漫遊記」の内容はより詳細に比較検討する価値があるように思われる。

2つには、中国近代史の現場に深く食い込んでいる点である。著者が上記⑦で自身の中国滞在「時期はまさに中国が専制帝国から共和国に改まる日々であり、さらに中国がまさしく満清の手から漢族に返還される日々であった」と述べている通り、激動の時代に際会した貴重な証言が

5 鄧搏鵬『越南義烈史』振亜社、1918年、47頁。（中国中山大学所蔵本、日本語版は鄧搏鵬著、後藤均平訳『越南義烈史：抗仏独立運動の死の記録』刀水書房、1993年、110-111頁）。

6 吉川次郎「物語世界から見た近代ベトナムと中国・日本—浙江『兵事雑誌』（一九一四—一九二六）所収の小説作品について—」『歴史の理論と教育』第133・134合併号、2010年。

7 孫遜・鄭克孟・陳益源主編『越南漢文小説集成』20巻、上海古籍出版社、2010年、237頁。陳氏は主人公が帰国後に病臥する場面は蘇曼殊『断鴻零雁記』からのほぼ丸写しであることも指摘している。なお、同書所収の「万里逋逃記」は浙江省図書館孤山館舎（古籍部）所蔵の第148期分が未収録である。

8 母親は清仏戦争時に黒旗軍の手で誘拐されてきたという話で、娘と故国を偲ぶ様子が描かれる。

綴られている。⑨では「陳某」と記される陳其美との上海での交流や⑩に描かれる広西陸軍幹部学堂への入学試験の様子、また著者が流浪の人生に終止符を打ち帰国したきっかけは、銃弾飛び交う第二革命下の重慶に身を置いたからであった(⑭)。6年間のうちの実に5年を中国で過ごしたわけで、細部の描写、現場の情景、当事者の心情などを異邦人の眼でリアルに伝えている部分は特筆すべきであろう。

3つには、とくに日本との関わりにおいて、20世紀初頭の東アジアの人々の流れに対する再認識を促す点である。「東遊運動」やあるいは「思想連鎖」という切り口からは、どうしても日本との関連、日本からの影響を大きく見がちで、そこを補正する材料の1つになるのではないか。阮伯卓が放浪生活の大半を中国で過ごしたことはすでに指摘したが、象徴的なのは、⑨で陸軍幹部学堂への道を切り開いてくれた「劉軍官」に対し、「元君」(阮泰拔)が日本滞在時に恩を受けた「某医学博士」(浅羽佐喜太郎)に対するのと同等の感謝の思いを抱くシーンであろう。また、阮伯卓の日本滞在期間は1か月あまりに過ぎなかったにもかかわらず、明治期日本に対する同時代批評に相当の分量を費やしており(④・⑤・⑥)、大半は賞賛というべきものだったが、そこでは多くの場合、ベトナム・中国との比較の視点、あるいは中国人からの批評という要素がまわりついている。ベトナム・中国・日本、さらには⑧の上海で遭遇した友人李一軒を通して語られるベトナムの映し鏡としての朝鮮も含めて、近代東アジアの大きな枠組みのなかで環流する人々をみる視座を「汗漫遊記」は改めて提供してくれるのではないだろうか。